

# 令和5年度 地域力パワーアップ大会 ～環境からつなげるまちづくり～

**日時** 令和5年5月28日（日）9時30分～12時30分

**場所** 【第一部】松山市役所本館11階大会議室

【第二部】城山公園

## 出席者

松山参与 河合 洋二

松山市坂の上の雲まちづくり部副部長兼まちづくり推進課長 田中 健太郎

松山市コミュニティ・アドバイザー 若松 進一

松山市コミュニティ・アドバイザー 笠松 浩樹

**参加者** 【第一部】 59名

【第二部】 57名

## 備考

- ・第一部の会場入り口にフードドライブコーナーを設置

※いただいた食品は、社会福祉協議会や、松山市内のフードバンク団体などを通じて、お困りの方々へ寄付されます。



## 次第

【第一部】・挨拶

- ・来賓紹介
- ・久谷地区まちづくり協議会の事例発表  
「我がまちの取り組み～里山とお接待文化～」
- ・余土地区まちづくり協議会の事例発表  
「余土地区での環境への取り組みについて」
- ・環境モデル都市推進課から事業の紹介  
「エコリーダー派遣事業について」
- ・松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評

【第二部】城山公園を歩いて自然観察をしよう！

## 内容

### 【第一部】

#### 1. 挨拶 松山市参与 河合 洋二



#### 2. 来賓紹介

#### 3. 久谷地区まちづくり協議会の事例発表

##### 「我がまちの取り組み～里山とお接待文化～」

- ・久谷地区は、昭和31年に荏原村と坂本村が合併し、昭和43年に松山市へ編入合併した。
- ・面積の7割が山地、3割が平野。
- ・人口は約9,500人、世帯数が約3,500世帯。65歳以上の高齢者人口は約35%で高齢化が進んでいる。
- ・愛媛県総合運動公園や生涯学習センター、えひめこども城などがあり、教育にいい環境が整っている。
- ・文化財では、四国八十八ヶ所霊場の浄瑠璃寺と八坂寺がある。国指定の重要文化財の渡部家住宅は、お接待所として利用している。
- ・松山騒動伊予八百八狸伝説を基に生まれた「伊予八百八狸物語」を地元の小学生が踊っている。
- ・お接待所は2箇所。坂本屋は、昔の遍路宿で、松山市からの支援を受け改装し、地元の方がお接待をしている。渡部家住宅では、久谷まち協が、3月から11月までの日曜日ごとにお接待をしている。
- ・「くたにぶらり見て歩き」は、各戸に配布し、小中学校の教材としても使ってもらっている。「久谷ふるさとMAP」は、お遍路さんにも配布している。
- ・広報は、年に2回の「まちづくり通信くたに」、ホームページ、フェイスブックを活用している。
- ・シンボルマークの「くたポン」は、八百八狸伝説の狸とお遍路さんをイメージして、作製。色々なところで、啓発活動をしている。
- ・耕作放棄地を活用し、コスモスの花を咲かせる活動を始めた。中学生や地元のこども会が種を蒔き、看板も描いてもらっている。県道や市道など目につく道路沿い、遍路道沿いの耕作放棄地4カ所で行っている。
- ・小さな親切運動に参加したところ「ポエム賞」を受賞し、コスモスの種をいただいた。
- ・地域の皆さんに楽しんでもらいたいとの思いから、「秋のフェスタ」を開催。トゥクトゥク2台で、コスモス畑見学コースと、坂本屋でお接待体験コースを運行。五



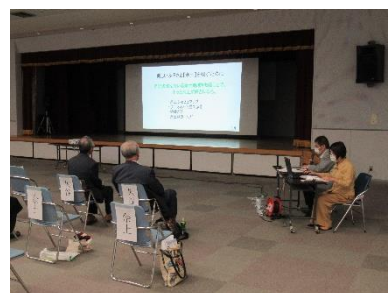
明地区まちづくり協議会のキッチンカーの出店や、地元の野菜、北条の鯛めしなども販売。渡部家の中の大広間ではフラダンスを披露した。

- ・春のフェスタも、桜が見ごろの運動公園と坂本屋を、2台のトゥクトゥクが走った。小学生の水軍太鼓や児童クラブのダンスなどもあり、地域子どもたちをはじめ、皆さんが楽しめるイベントになった。
- ・今後も、フェスタは、年に2回開催していきたい。
- ・荏原地区にある大蓮寺には、河東碧梧桐が滞留していたことから、昔から俳句が盛ん。俳句コンテストでは、小中学生から作品を募集し、入賞者は荏原公民館と坂本公民館の文化祭で表彰し、学校や久谷まち協の掲示板で掲示している。
- ・カーブミラーを設置する際、松山市の条件に合わない場所に対して、久谷まち協から設置費用を補助している。
- ・交通安全ののぼり旗を小中学校のPTAと協力して設置していたところ、松山南警察署から感謝状をいただいた。
- ・今後、久谷の皆さんで「人づくり」「健康づくり」「おもてなしの里づくり」を行って、住民の絆を深めたいと考えている。久谷の魅力を掘り起こして、次世代を担う若者に文化財や歴史的遺産、伝統文化などを承継できるようなまちづくりを目指していきたい。
- ・空き家、耕作放棄地、路線バス廃止に伴う高齢者の交通手段対策などどれも大きな問題で、すぐに解決できるものではないが、それぞれ検討委員会を立ち上げ、議論を重ねていく。

#### 4. 余土地区まちづくり協議会の事例発表

##### 「余土地区での環境への取り組みについて」

- ・余土（ヨド）と余戸（ヨウゴ）の違い。現在、余土は地区名を、余戸は町名を表している。
- ・第1次まちづくり計画から10年が経ち、見直しを行い、令和4年に第2次まちづくり計画が完成。
- ・まちづくりの目標を、「みんなで創る明るい住みよい余土のまち」とし、重点テーマは、「安全で安心して暮らせるまち」、「美しい環境が広がるまち」、「地域の絆がつながるまち」の3つ。
- ・「環境美化活動の強化」として、地域住民を対象に施設見学や講演会などの環境学習会を年に1回開催した。今までに、今治市クリーンセンターや石手川ダム、浄水場、企業の施設などを見学した。
- ・各地域で、公園や河川敷、用水路の清掃活動を実施。まつやまマイロードサポーター事業で名付けた「盲天外通り」では、余土まち協だけではなく余土中学校の生徒や余戸町内会連合会なども清掃活動に参加。環境美化活動が定着し広がっている。



- ・「エコ活動の推進」では、長期休業中の子どもの居場所になればと、令和3年度から、「サードプレイス余土」を、余土公民館を拠点に開催、松山南クリーンセンターで焼却施設を見学し、ゴミ処理などについて学習した。他にも、松山市のエコリーダー派遣事業を使って海洋プラスチック問題を学んだり、地元の神社でネイチャーゲームを通じて自然に親しんだり、杉やヒノキのカナクズを利活用した部屋飾りや芳香剤の作成を行った。
- ・「緑化の推進」として、6月にはペチュニア、10月にはパンジーの苗を土とプランターのセットにして、余土公民館や分館、公園など配布。
- ・緑のカーテン運動では、地域の皆さんにゴーヤの苗を600ポット配布しているが、毎回好評のため配布時刻前から行列ができています。できたゴーヤは食卓のぼり、それも楽しみのひとつとなっている。その後、フォトコンテストを実施し、優秀作品をクリアファイルに印刷後、余土小・椿小・さくら小の新入生に入学祝として渡している。
- ・余土地区の花であるタマスダレを各家庭で咲いている姿を見ることがなくなってきたので、地域に広げるため、学校や希望者に配布している。
- ・今後は、新たに、石手川や重信川の野鳥を観察したり、海へ流れ出るプラスチックが川ではどのような状態なのか調査したりと、川を活かした環境学習も考えている。
- ・これらの取り組みを行うだけでは「美しい環境が広がるまち」の目標達成ができないのではないかと考えている。自分の住んでいる余土を深く知ることで、余土の魅力に気づき、もっと好きになり、美しい余土を残したいという思いが強くなると期待し、ほかにも様々な取り組みを行っている。
- ・「余土ふるさとマップ」は、昔から残る句碑や史跡などの歴史的財産、現代に作られた公園や橋などを掲載。「余土ぶらっと見て歩き」は、マップを手にした方からもっと詳しいガイドブックが欲しいとの声に応え、製作した。
- ・「絵はがき」は、美しい余土の風景を8枚1セット150円で販売している。
- ・平成30年度から、余土の歴史や自然などを問題にした「余土検定」を実施している。
- ・シビックプライドの醸成につながるような取り組みを行いたい。そのためには、住民の皆さんに地域活動に参加していただき、身近な魅力に気付いてもらいたい。そのきっかけを、余土まち協が作ることができればいいと思っている。今後も、「みんなで創る明るい住みよい余土のまち」を目指して活動する。

## 5. 環境モデル都市推進課から制度についての説明 「エコリーダー等派遣事業について」

## 6. 松山市コミュニティ・アドバイザーからの講評

### 【若松 進一】

- ・久谷まち協は、まち協と公民館が一体となって地域づくりに取り組んでいて、大変力強く感じた。
- ・余土まち協は、まちづくり計画の必要性を感じ、何のためにまちづくりをするのか、まちづくり計画に基づいてどうするのかということを考えている
- ・私たちは、どのようなコミュニティの中で生きているのか考えてほしい。
- ・家庭のコミュニティは、最近、人数が減って、家庭の中で会話さえも聞こえない。基本となる家庭のコミュニティをもう一度見つめなおしていく必要がある。
- ・地域コミュニティは、地域でどのように暮らし、貢献するかということを見ると、地域とのかかわりは非常に重要。ゴミは、不燃物、可燃物、自燃物、類燃物とあるが、それを人に例えると「言われてもやらない人」「言われたらやる人」「自らやる人」「人にも力を与えながら自らやる人」に、分けることができる。全体の65%と言われる不燃人が、可燃人になると、とても素晴らしいこと。ここに来ていない人たちにどのようなサポートをして、地域づくりに関わってもらえるか、ということを考える人を作っていくべき。
- ・デジタルコミュニティ。ほとんどの人たちがスマホを持ち、暮らしの中に息づいている。自分たちの地域を宣伝したり、自分たちのことを書きこんだりしている。それをどのように地域づくりへ活かしていくか、デジタルコミュニティをどう広めていくかということもこれから考えていく必要がある。



### 【笠松 浩樹】

- ・今日のテーマは、「環境からつなげるまちづくり」。「つながる」は他律的で、「つなげる」は自発的、自主性がありとてもいいと思った。
- ・久谷まち協も余土まち協もかなり実践している先進事例。これらを参考に展開していくことは非常に有効。
- ・環境から世代をつなげる。地域の中にいる子どもや高齢者など色々な世代が、どうやって活動に参画していくのかを意識する。それと、昔から住んでいる人もいれば、新しく移り住んできた方もいる。その人たちをどうつなげるかということも重要。
- ・環境から暮らしをつなげる。暮らしという身近なところからどうやって広げていくか。久谷地区は、歴史を掘り



下げていくには非常に材料の多いところ。余土まち協は、ゴミやリサイクルなどから世界に広がっている。

- ほかの課題につなげていく。例えば、イベントから始まって、そこからさらに耕作放棄地やフードロスなど日常の身近な課題にどう広げていくか。
- 新しい課題が次から次へと出て大変かもしれないが、それらを乗り越えていく楽しさや、皆さんが自発的に活動できる楽しさ、新しい良さも見えてくると思う。
- エピソードをひとつ。近所の老夫婦の裏山に木が茂って洗濯物に陽が当たらない、ということを知り、できることをとということでコツコツ木を切った。その木は、薪ストーブの材料として使わせていただいて、いい関係ができた。ご近所付き合いからの環境ということも十分に考えられるので、このように広げていくのもいいと思う。

## 【第二部】城山公園を歩いて自然を観察しよう！

- 松山市エコリーダー派遣事業を活用。エコリーダー4名とアシスタントエコリーダー2名のもと、小学生児童25名とまちづくり協議会関係者32名の合計57名を5つのグループに分けて、城山公園内に設けられたチェックポイントを巡りながら、自然観察などの体験学習を行った。

### 【チェックポイント1】

- サザンカの葉の中に隠された洗濯ばさみを見つけるゲームを実施。
- 参加者は、リレー方式で上下左右に目線を変えながら、隠された洗濯ばさみを探していた。

### 【チェックポイント2】

- オナモミの実を使った的あてゲームを実施。
- 小さくなって着なくなったセーターや手袋などを再利用した的と、オナモミの実を数個まとめたボールを使用。参加者は、1グループ一斉に投げて、得点を競った。



### 【チェックポイント3】

- ツバキの葉などに葉で作ったバツタを隠し、何匹隠れていたかを当てるゲームを実施。
- バツタを見つけている途中は、話すこと、指をさすこと、コースを逆走することは禁止で、後からグループで1つの答えを出すというルールをエコリーダーが提示。
- 参加者は、ルールを守りながら、じっくりと木や葉を観察していた。

#### 【チェックポイント4】

- ・環境に関する〇×クイズを全3問出題。問題はグループごとに異なるものを出題。
- ・参加者は、グループで相談しながら1つの答えを出していた。



#### 【チェックポイント5】

- ・今日の振り返りと総まとめとして、エコリーダーが作成したジオラマを使って、「環境とまちづくり」について参加者に考えてもらったり、はがきにも使えるタラヨウの葉を紹介したりするなど、自然に関する講義を行った。
- ・総まとめ終了後、参加児童に対し、エコリーダーからはタラヨウの葉やクラフト工作セット、チェックポイント3と同じ手作りバッタなどをプレゼントした。松山市からは、同日に開催されている花園日曜市に出店している三津浜焼きと引き換えできるチケットと、竹で作られた地球にやさしいカトラリーセットなどをプレゼントした。

